天才棋士
vs
催眠包茎おじさん

将棋道場でキモいおじさんと指す羽目になった夜〇神〇衣
「可愛いくて綺麗でナマイキな小〇生がいるって聞いて、
はるばる遠い所からわざわざ来たんだって！
僕と一局くらい指してもらっても良いかなー？」
「どうせ私が勝つに決まってるんだしさっさと終わらせましょ。」
（なんでこの私がこんなキモいおっさんと指す羽目に・・・。
帰ったら師匠にうんと褒めてもらうんだから！）

～十分後～
あっという間に将棋は天〇の勝勢になっていた。
「もう投了したら？小〇生に負けるなんてホント雑魚ね。
所詮道場のキモいおじさんなんてこんなもんね♪」
フン！
「いやー天〇ちゃんはホント強いなあ・・・。もう一戦しない？
子供相手だと思っておじさん手を抜いちゃっててさー。
まあおじさんの本気が怖くなって勝ち逃げしても良いけどさ。」
「ふんっ！じゃあもう一戦だけ付き合ってあげるわよオッサン！」
（良し！食いついたっ！）

「ちょっと待ってね！おじさん必勝のルーティンがあるんだ！
こうやって二分ほど振り子を見て心を落ち着かせるんだ。
天〇ちゃんも心が落ち着くからちょっと付き合ってよ♡」
「そこまで言うなら・・・見てやってもいいけど。」
「振り子をじーっとみててね。心が落ち着いてくる。
1・2・1・2。繰り返してどんどんリラックスしていくよ。
全身の余分な力が抜けてふにゃふにゃになるよー。」
アラン
アラン

「天〇ちゃん僕の言葉聞こえてるかなー？
・・・反応なし！きっちり催眠にかかったみたいだね！
じゃ！今からナマイキな天〇ちゃんの大事な深層心理に
おじさんが好き放題ラクガキしちゃうから覚悟しろクソガキ！」
「1つ、天〇ちゃんは一生僕に将棋で勝てなくなる。
2つ、僕に将棋で負けたら、〝僕のお願いは必ず聞くようになる〟
最初はこんなもんで許してやるか・・・。優しいなあ僕は！」
ブラン
ブラン

パンッ！
「天〇ちゃん起きて！将棋指すよ！。」
「あれ。私何してたっけ？えーっと・・・。」
「僕と一緒に振り子を見て寝ちゃってたんだよ・・・。
僕の必勝ルーティンに付き合わせちゃってごめんね。
僕が先手を貰うよ。今度は本気で指してあげるからね！」
ハッ!!!
（何か腑に落ちないけれど・・・。気のせいよね。
とりあえず目の前の将棋に集中しないと。）
「さあかかってきなさい。速攻で潰してあげるわ！」

～五分後～
「嘘・・・この私が2歩なんて・・・。」
「あんなに強い天〇ちゃんが反則の手を差しちゃうなんて珍しいね。
僕が本気を出すまでもなかったか（笑）。でも負けは負け。
だから〝僕のお願い〟聞いてもらっちゃおうかなー♡」
「わかってるわよ！〝将棋で負けたらいくらでもあんたのお願い〟を
聞くのが〝将棋のルール〟なんだから！」
「あーそういう認識になっちゃったんだ、これはこれで面白いか。」
「何ボソボソ言ってるの！早く〝お願い〟しないと帰るわよ！」
ぐぬぬ

「じゃあ天〇ちゃんには僕のお嫁さんになって貰おうかなー。」
「はぁっ？え、いやっ！・・・・・・・・うそ・・・。」
「嘘じゃないよ！天〇ちゃんに一目惚れしちゃってさ。
ちゃんと結婚して籍も入れてあげるから安心してね！」
「1桁の可愛いお嬢様小〇生のお嫁さん欲しかったんだー。
生意気で世間知らずだけど、おせっかいな性格みたいだし、
僕のママになって貰いたくておチ〇ポさっきからギンギンだわー。
勿論僕のお嫁さんになるんだから、ダメ押しとして
僕の事が一番好きになるように〝今〟催眠かけてあげるからね」

「そんなのあり得ない！助けてっ！せんせっ」
パンッ！
「無駄な抵抗お疲れ様（笑）。また認識変えちゃおうね～・
二回目はもう振り子なしでも催眠かけれるんだわ。
年の差が親子ほどあるおじさんの僕に抵抗するなんて、
高飛車なメスガキお嬢様にはちゃんと〝教育〟しないとね！」
ピッ！

ぼー
「えーと。天〇ちゃんは今まで自分でも気づかなかったけど、
おチ〇ポの匂いフェチで不潔な男性の体が大好きなんだ。
そういう人に将棋で負けると、天〇ちゃんは直ぐ惚れちゃって、
何でも言う事聞いちゃう簡易オナホ小〇生なんだよね？」
「・・・はい。夜〇神天〇は不潔なおじさん大好きな小〇生です。
洗ってないおチ〇ポの匂いが大好きなオナホ？です。
チ〇ポが不潔でキモいおじさんと結婚するのが私の夢です。」
「そうそう（笑）。天〇ちゃんは素直で賢い子だねー。」

パンッ！
「天〇ちゃん起きて！どう？僕のお嫁さんになってくれるかな？」
「えっ・・。そうね。将棋で負けたんだから仕方ないわよね。
良い？あんたみたいな不潔でキモいおじさんを好きになるのは
不潔好きな私くらいなんだから！調子に乗らないでよね！」

パンッ!!

「じゃあさっそくで悪いけど、お嫁さんになった天〇ちゃんに
して欲しい事があるんだ。
こんな不潔な事を女子小〇生の天〇ちゃんに頼むのもなんだけど、
天〇ちゃんをお嫁にした喜びで射精しちゃったんだ・・・。
綺麗にしてくれないかなー・・・？なんて。」
「射精・・・？よくわからないけどお漏らししちゃったの？
ズボンが濡れててイカ臭い匂いがプンプンするわね。
私がきちんとトイレで綺麗にしてあげるから付いてきなさい！」

将棋道場
男子トイレ個室
「早くその汚れた下着を脱ぎなさい。
よくわからないけど、私のせいで汚しちゃったんでしょ？
射精？したところは、お嫁さんの私が綺麗にしてあげるから。」
「天〇ちゃんホント優しいなあ。
それでこそお嫁さんに貰ったかいがあるってもんだよ（笑）。
じゃあお言葉に甘えて、性知識皆無の天〇ちゃんに
僕の早漏チ〇ポ見せちゃおうかな～？」

「えっ？お〇ん〇んから汚い膿が出てる・・・。何これ病気なの？
とりあえずティッシュで拭いてあげるから待って！？」
「やっぱりおじさんの包茎チ〇ポは催眠済みでも女子小〇生には
刺激が強すぎたようだね・・・。
落ち着いて天〇ちゃん。いいかい？」
ムワッ
ネチョネチョ

「箱入りお嬢様の天〇ちゃんは初めて見ると思うけど、
これは精子って言って、オスがメスを誘う時に出すサインだよ。
僕が天〇ちゃんをお嫁さんにしたい！オナホにしたい！って思いが
溢れちゃったんだ証拠なんだ。
お嫁さん側の天〇ちゃんはこの思いに応える必要があるんだよ。
不潔なおじさん大好きな天〇ちゃんは勿論平気だよね！。」

「確かに私は不潔な物が大好きだし、あんたのお嫁さんなんだから
この白い液体の、精子？って奴は綺麗にしてあげるわよ！
でも、この周りについてる黄色いカスは何なのよ！
おしっこの匂いがするし、お風呂に洗ってないだけじゃない！
えっ？チンカス？って言ってお嫁さんが食べる物？なの？
あんたのチンカスは美味しく感じるように催眠？したって何よ。
人間が、ましてや小〇生が食べるようなものじゃないってのは
見たらわかるわよ！あれ？なかなか良い匂いじゃない・・・。」

ムワァ…

ネチョ
ネチョ

「早くおチ〇ポ綺麗にしてほしい所だけど、一つお願いがあるんだ。
〝僕のくっさいチンカスと精液はとても貴重なものだから〟、
お嫁さんの天〇ちゃんには味わって食べて欲しいんだよね。」
「フー！フーッ！すぐに舐めとって綺麗に上げたいけど仕方ないわね。
ちゅっ！れろれろっ！こんな不潔で美味しい物、すぐに食べたら
確かにもったいないかもね。クンクンっ！スー、ハー。」
スーハー
ちゅっ
レロレロ
「いくら美味しく感じるからってガッツきすぎじゃない？
それ一週間風呂入ってないおっさんのおチ〇ポのカスだよ？
そんなに食べたら体壊すと思うけどなあ。」
「私はあんたのお嫁さんだから綺麗なおチ〇ポにしてあげるの！
チンカス食べたくてっ、こんなことしてる訳じゃないんだからっ。
フー。ちゅぱっ！れろっ！おえっ。はー。はー。
こんな美味しいものがあったなんて！ずっと舐めてたい・・・。
これからおチ〇ポ掃除は私がしてあげるから勝手に洗わないでよね！」

「大分・・・フー。綺麗になったわね。見直したわよあんた。
こんな良い不潔なチ〇ポと美味しいチンカスもってるなんて。
口と鼻の中がイカ臭くてうがいしてもしばらく取れないかも♡」
「ごめんね天〇ちゃん！せっかく掃除してもらったところだけど、
愛情たっぷりチ〇ポキスのせいで射精ちゃう！顔で受け止めてっ！」
「出すなって言っても出すんでしょ。早く出しなさいよ♡」
ピカッ
ピカッ
[あー、女子小〇生洗脳して性処理オナホにするのチ〇ポに効くわー。
あの天才棋士天〇ちゃんのあきれ顔のオナホ面に顔射するっ！
出すぞっ！俺専用ロリ嫁に出るっ！」

ビュッ！
ビクッ
ガタッ

「あー気持ちよかった。ちゃんと顔で受け止めれて偉いぞ天〇ちゃん。」
「おえっ♡顔についた精子臭すぎ♡
女子小〇生の顔中に遠慮なく精子擦り付けるなんて、
不潔おチ〇ポの旦那様じゃなかったら許されないんだからね♡」
「〝一か月くらい学校休んで、僕の家で泊まり込み合宿〟して欲しいなあ。
将棋の研究しながら、師匠で夫の僕の世話をするんだよ？
ただし、僕に一度でも負けたら子作り合宿になるから覚悟してね♡」
「うん・・・。将棋で負けたら子作りする・・・♡
でも私が将棋に勝ったら、このおチ〇ポのチンカス
貯まり次第全部食べさせてもらうからね♡」
「すっかりチンカス大好きになっちゃったね天〇ちゃん。
大丈夫。僕はお風呂に入らない主義だからすぐに、
天〇ちゃんが大好きな不潔でくっさいチンカス
いっぱい食べさせてあげるよ！」

TO BE CONTINUED…